

原 著

高齢者の死の準備状態に関する研究

— 5年間の経時的変化から —

石井 京子 *・上原ます子 **

Changes in the Preparedness for Death of Elderly People over a Five-Year Period

Kyoko ISHII * and Masuko UEHARA **

Abstract

Purpose: This study was purposed to reveal changes in the attitude to death of the elderly people, based on five-year cross-sectional-method surveys of elderly people on their preparedness for death.

Method: Questionnaire surveys were conducted for the Senior Citizens' University between 1996 and 2000.

Results: Average age was 67, subjects consist of almost the same numbers of male and female. 70% of the subjects have a spouse, and 72% have had the experience of nursing a member of their families until death. The largest number of the subjects cited their own home as a desirable place of death. The percentage who talk with their families about a desirable way of their death and funeral exceeded 50% from 1998 onwards, compared to only 7 % in 1996. 80% talked about death with dignity and informing of disease; 70% about the death of familiar person; 61% about how they wish to be dealt with if they are taken ill with a fatal disease. While few people had put their affairs in order, disposed of unnecessary belongings, or started something that had been left undone in 1996, 20% of the 2000 survey subjects answered they had done so. In spite of such increases, the percentage who had prepared a will remained at around 8 % for the five years.

Discussion: The results showed that although the knowledge about preparation for death has increased after 1997, but elderly people are not sufficiently motivated enough to take action for preparation. It would be necessary to investigate elderly persons for the variable ages factor in order to achieve the better results.

キーワード: 高齢者 (elderly people), 死の準備状態(preparedness for death), 横断研究(cross-sectional-method surveys),
(**Key words**) 看取り体験 (nursing experiences until death)

I. 問 題

人間の全生涯を発達的变化として捉える生涯発達においては、看取り、あるいは死という問題はすべての発達時期に起こるものであり、死の受け止

めやその意味などは幼児期から青年期、あるいは親の看取りなどが多くなる成人期のいずれの年代にとっても重要な課題と捉えられている。しかし、発生頻度として最も多いのは高齢期であることから、高齢期とは死に対する問題の提起され易い時

* 大阪市立大学看護短期大学部 (Osaka City University College of Nursing)

** 大阪府立看護大学 (Osaka Prefectural College of Nursing)

2002年8月12日受稿／2002年9月10日受理

期とみなすことができる。我が国の死亡者は約90%が病院など施設で死亡している現状の中で、患者や家族の意思を無視した高度医療や閉ざされた死への批判が生じ、近年では延命治療や尊厳死など死に至るまでの医療と患者の生き方を巡る問題も議論されるようになってきた。そして、患者本人のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)を重視した治療に対する希望の受け入れや、死に至る過程についての意思の尊重、あるいは死への対処についての準備も重視されるようになってきた。

死に対する研究ではTempler(1970)による死の不安尺度、Spilka(1977)、金児(1994)の死観尺度、Wong(1994)、平井ら(2000)らの死生観など死に対する尺度が作成され、死についての態度が明らかにされてきた。一般的に態度には認知評価的側面・感情的側面・行動的側面があるとされる。死に関する従来の研究で明らかにされてきたのは、不安や死観・死生観など感情的側面と認知評価的側面に重点が置かれているように思われ、行動的側面に焦点を当てたものは少ない。行動的側面の1つとしては死に対する準備行動があげられる。Deeken(1996)は死の準備行動として家族に知らせていない負債はあるかなどの経済・法律上の諸点、預金通帳の場所など日常生活の問題、その他健康管理問題、精神面への対応の4側面をあげ、それぞれの具体的な項目への対処の必要性を述べている。高齢者の死の準備とその受け止めを分析した河合ら(1996)は、準備の実施度が死の積極的受容に関連を持つことを明らかにし、行動的側面の認知評価的側面への影響を示している。では、行動的側面としての高齢者の死の準備に影響をあたえる要因は何であろうか。例えば前期高齢者と後期高齢者では死の準備がどの程度行なわれているのか、あるいはどのような準備に差異が見られるのかなどについては明らかにされていない。

一方、死の態度尺度として作成された死生観に関連するパーソナリティ要因については多くの研究があり、かなり一貫した結果が見られるが、死生

観が個人の属性や経験から影響される側面については一貫した結果が得られていない。青年期の死生観の形成に及ぼす経験や思索の影響を分析した丹下(1995)は、近親者の死の体験は死生観には関係しないが、自分のいのちに関わる病気や事故の体験がないことが死の軽視に関連を示すことから、心的発達の著しい青年期では看取りという間接的な経験ではなく、自分の命に関わるような直接的な体験によって死生観は影響を受けると述べている。しかし、高齢者を対象に死の不安や態度を調査した河合ら(1996)が、死別体験は死に対する態度のうちの積極的受容に正の関連を持つことを明らかにしたことから、高齢者が体験した看取りが死の意識や態度に及ぼす影響には、若年者の場合とは質的な違いがあることが示唆される。また、高齢者の看取り体験を分析した上原ら(2000)は、死についての受け止めは多くが「本人の本意が分からなかった」としており、看取られる側からの意思表示がほとんど見られない現状を明らかにしている。しかし、看取り後の反応としては「死に対して意識が変わった」、「死の準備をしようと思った」、「思いやりなど周囲への意識が変化した」と述べていることから、看取りの体験が自分自身の死を意識化し、それが死の準備行動に連動して行くことを示している。ここから高齢者にとって死に対する態度の形成としての死の準備にも、自身に起きた重大な体験だけではなく看取り体験などによる意味の思索があると予測される。

欧米では高齢者の死についての報告は1950年代から行われているが、我が国では長い間忌み嫌うものとして扱われてこなかった。その原因として金児(1994)は大学生の子どもと親の調査から、死観は親から子どもへは伝えられておらず、それは「死を語るには死が実在しなければならないが、その場を喪失したためであり、死をタブー視した現代社会では死を語ることは家の中ですら出来なくなった」と述べている。このように死に関する概念の形成や準備は時代背景により影響される側面が

あることが示されている。近年、我が国でも死を巡る様々な議論が社会的に行われるようになってきたが、これらが高齢者の死に対する意識や準備にどのように影響しているかを明らかにすることが必要である。高齢者が現在行っている死の準備の側面が明らかになることは、今後の高齢者へのサポートを考える上でも有用である。

本研究の目的は、この5年間における高齢者の死の準備状態の現状を明らかにし、その準備に個人要因・家族要因・看取り体験などがどのような関連を持つのかを明らかにすることである。

II. 方 法

対象：1年間開講される〇老人大学の受講生である(受講生は希望者の中から抽選で選出され、重複年数の受講は出来ない)。

方法：死についての意識と準備についての集合質問紙調査である。調査は講座期間がほぼ2/3経過した11月に、全員が受講する教養講座の前に調査内容の趣旨を説明し、調査への協力を依頼した。その後、調査票を配付し無記名による記入後、出口に

おいた回収箱に各自投入する方法で実施した。調査期間は1996年から2000年までの5年間である。調査項目：

- 1 死に関連する話題 尊厳死や告知など7項目について話題にしたことがあるか、話題にした場合は誰と話をしたかについて尋ねた。
- 2 死の準備行動 Deeken (1996) の4側面、河合ら (1996) の13項目を参考に作成した11項目である。自分の死に対する希望や準備行動について、話題にしたことがあるかどうか、さらにそれを誰と行ったかについて尋ねた。
- 3 フェースシート 性別・年齢・家族構成・看取り体験など。

分析はSpss.v.10で行った。

III. 結 果

1. 対象の属性

分析対象者の属性はTable 1に示した通りである。1996年から1998年までは女性が受講生の半数を占めているが、1999年以降は逆に男性が半数以

Table 1 対象の属性 人数 (%)

年度		1996	1997	1998	1999	2000
性別	男	221(47.2)	220(47.9)	194(44.8)	136(52.3)	141(56.4)
	女	247(52.8)	239(52.1)	239(55.2)	123(47.3)	108(43.1)
	無回答	0	5(1.1)	6(1.4)	0	1(0.4)
計		468	464	439	259	250
平均年齢		67.8	67.1	67.1	66.5	67.9
配偶者	あり	349(74.6)	343(73.9)	304(69.2)	194(74.6)	189(75.6)
	なし	119(25.4)	105(22.6)	127(28.9)	55(21.2)	52(20.8)
	無回答	0	16(3.4)	8(1.8)	10(3.9)	9(3.6)
居住	1人	58(12.4)	—	—	39(15.0)	38(15.2)
形態	2人以上	376(80.3)	—	—	216(86.4)	204(81.6)
看取り経験	あり	312(66.7)	314(67.7)	—	186(71.8)	188(75.2)
	なし	147(31.4)	145(31.3)	—	68(26.2)	56(22.4)
	無回答	9(1.9)	5(1.1)	—	5(1.9)	6(2.4)

上を占めていた。年齢区分をみるといずれの年度も60歳代が72-75%、70歳代が22-26%、80歳代が4%で、平均年齢も各年度ともほぼ同様であった。家族については配偶者ありが70-75%で、これも年度による差異はなかった。看取り経験は1998年度は質問項目になかったが、1996年の66.7%から2000年は75.2%と少しずつ増加していた。

2. 希望する死亡場所

Fig 1 に示したように、希望する死亡場所については自宅希望が1996年から2000年までいずれの年度もほぼ50%あり、病院、ホスピスでの希望もほぼ年度による変動は認められなかった。施設への希望はいずれの年度もほとんどなかった。どこでも良いという回答が毎年ほぼ10%余りあった。

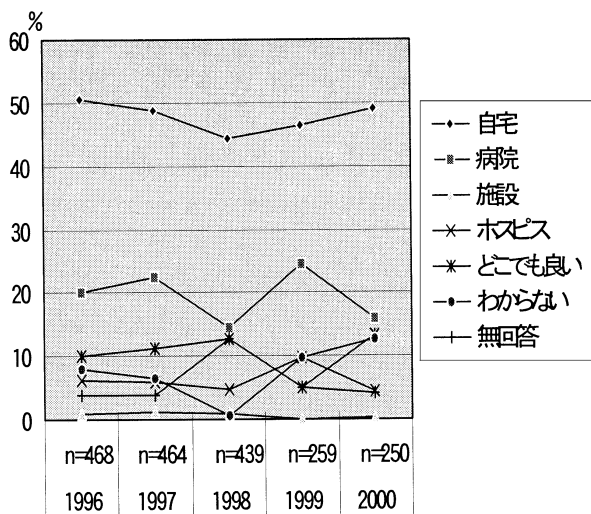


Fig 1 希望する死亡場所の経年変化

3. 最期を看取って欲しい人

自分の最期を看取って欲しい人を複数回答で求めた。配偶者を希望している割合が5年間とも50%以上を占め、さらに年々やや上昇していた。娘、息子を希望する割合はわずかずつではあるが減少していた。嫁、孫は10%前後であり、看取り者としてはこちらもわずかずつではあるが減少していた。看取りを希望しないという回答は、いずれの年度もほぼ2%の比率を示していた。

4. 死についての話題と準備行動の変化

死についての話題の質問項目は1998年以降の3年間のみのデータである (Fig 2)。「有名人の死」、「尊厳死や延命処置」、「病名告知」はいずれの年度も話題にしている率がほぼ70%を越え、その話し相手はいずれの項目についても配偶者が72-77%、子どもが11-13%であった。話題にしている割合の上昇率は「病名告知」がもっとも大きく、1998年は67%であったが2000年には84%が話題にしていた。

第2人称といわれる「身近な人の終末期の様子」や「身近な人の終末期の世話の様子」は、約60-70%とやや話題にする割合が少なかったが、これらも年々少しずつではあるが上昇していた。

Fig 4 が自分自身の死の準備行動を示したものである。5年間の変化を見ると、「自分の希望する亡くなり方を伝える」という項目は1996年は8%であったが、1998年は50%となり、2000年には70%近くになるなど約9倍の増加を示していた。同様に「希望する死亡場所を伝える」、「自分の死が避けられない時の対応を伝える」も、1997年を境に急激な準備行動の伸びが認められた。また、「残される家族の生活維持について伝える」、「預金や保険について伝える」など自分の死後の家族の生活についての対応にも、同様な伸びが認められた。

さらに準備行動としての実際の行動である「身の回りの整理」や、「やり残したことへの取り組み」は、伝達行動としての準備行動と比べると実施率自体はそれほど高いとはいえないが、他の項目と同様に1996年は5%の準備行動が1998年には20%になるなど5倍の増加率を示していた。しかし、「遺言状の作成」の実施率はいずれの年度も8%で、5年間ほとんど変化していない。このように1997年を境に急激な伸びを示した項目群と、やや伸びを示している項目群と、ほとんど変化を示さない項目群の3群に分けられた。

Table 2 最期を看取って欲しい人の5年間の変化(複数回答) 人数(%)

	1996	1997	1998	1999	2000
配偶者	256(54.7)	267(57.5)	229(52.2)	161(61.9)	157(62.8)
娘	196(41.9)	198(42.7)	181(41.2)	105(40.4)	95(38.0)
息子	167(35.7)	143(30.8)	145(33.0)	92(35.4)	87(34.8)
嫁	72(15.4)	65(14.0)	60(13.7)	34(13.1)	19(7.6)
孫	56(12.0)	45(9.7)	55(12.5)	26(10.0)	16(6.4)
その他家族	21(4.5)	19(4.1)	14(3.2)	12(4.6)	11(4.4)
友人	9(1.9)	6(1.3)	8(1.8)	4(1.5)	3(1.2)
その他	2(0.4)	7(1.5)	4(0.9)	6(2.3)	6(2.4)
特に					
決めていない	61(13.0)	51(11.0)	67(15.3)	26(10.0)	45(18.0)
看取りを					
希望しない	7(1.5)	6(1.3)	10(2.3)	5(1.9)	5(2.0)
無回答	15(3.2)	6(1.3)	18(4.1)	2(0.8)	6(2.4)

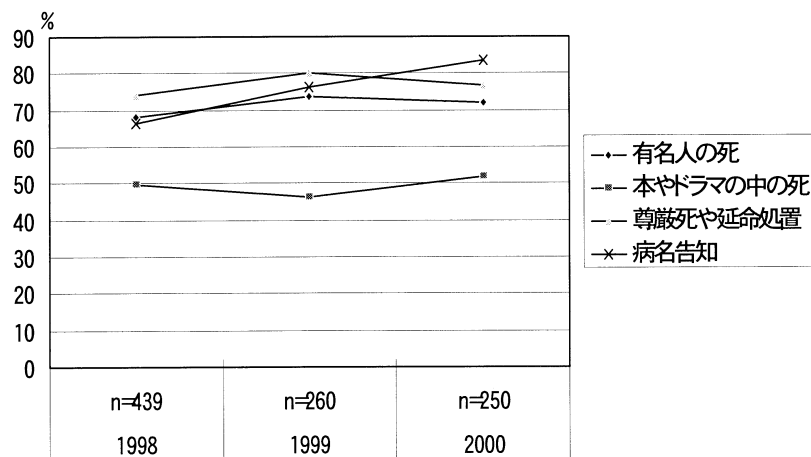


Fig 2 死についての話題の実施率変化

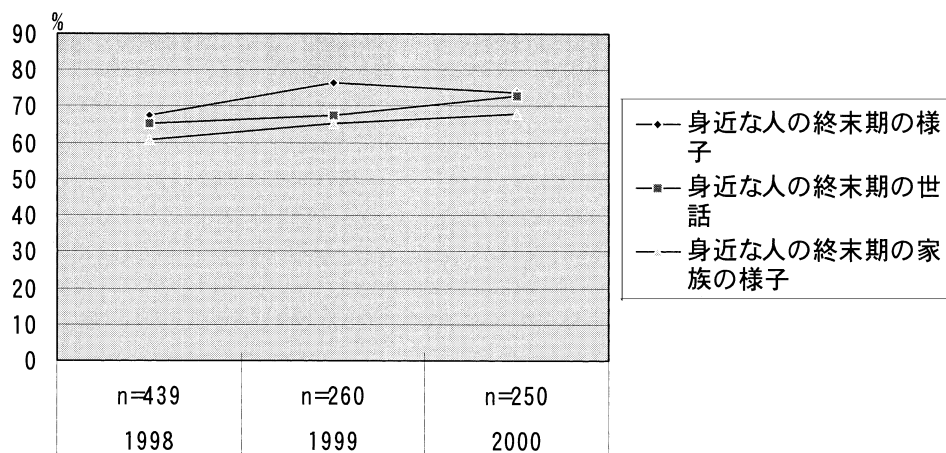


Fig 3 身近な人の死についての話題の実施率変化

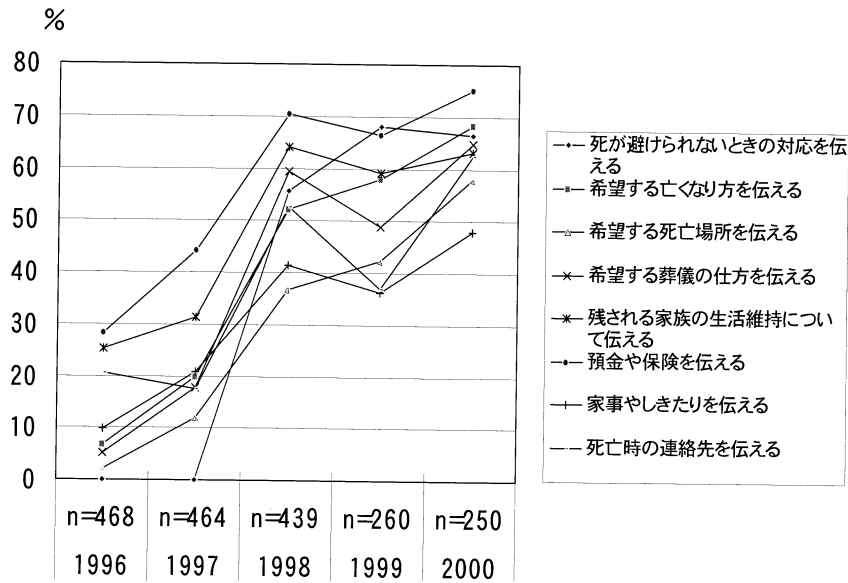


Fig 4 自分の死についての準備状態の5年間の実施率変化

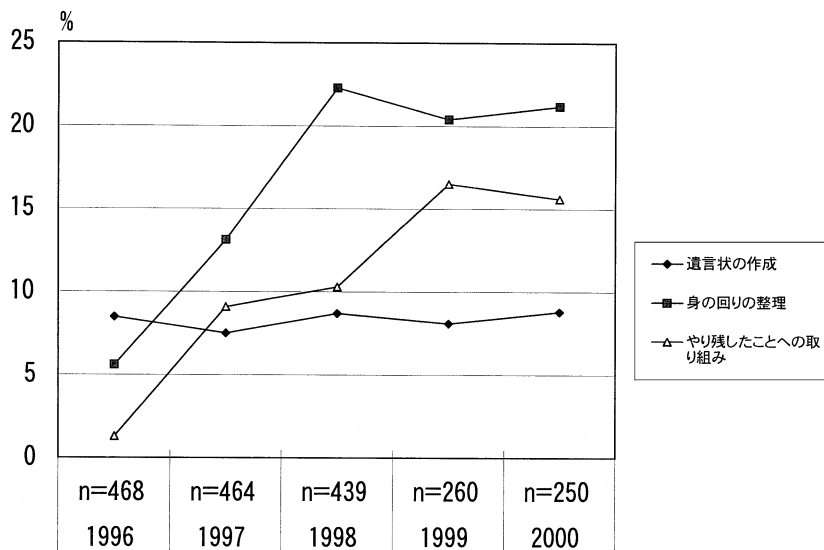


Fig 5 死の準備行動の5年間の変化

5. 対象の属性別死の準備状態 (2000 年度調査の分析)

対象の属性と死の準備行動についての関係を χ^2 検定を用いて分析したのが Table 3 である。年齢は対象を 60 歳代、70 歳代、80 歳代と分けると 80 歳代の人数が少なすぎるために 70 歳以上としてまとめ、60 歳代と 2 群にして分析を行った。希望する

死亡場所はどこでもよい、分からないという回答を除いて“自宅、それ以外”に分けた。死についての抵抗感は、あり・かなりありという回答を“抵抗感あり群”、余りない・ないを“抵抗感なし群”と 2 群に分けた。過去に体験した看取り時の主たる看取り者について“自分が中心、その他”に分けた。

性別では「家族の生活維持の方法を伝える」項目

Table 3 対象の属性別死の準備状態 (χ^2 検定)

死の準備項目		性別	年齢	配偶者の有無	同居家族の有無	希望する死亡場所	死を話す抵抗感	看取り経験の有無	主たる看取り者
有名人の死	話をした	n. s	6.72	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない		**						
本の中の死	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	4.02	n. s
	話さない							*	
尊厳死	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない								
病名告知	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない								
身近な人の終末期の様子	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	6.17	n. s
	話さない							*	
身近な人の終末期の世話	話をした	n. s	4.32	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない		*						
身近な人の終末期の家族死が避けられない時の対応	話をした	n. s	n. s	4.12	6.61	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない			*	**				
希望する死亡方法	話をした	n. s	n. s	12.32	4.47	n. s	n. s	n. s	5.08
	話さない			***	*				*
希望する死亡場所	話をした	n. s	n. s	7.05	4.39	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない			**	*				
希望する葬儀方法	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない								
家族の生活維持の方法	話をした	15.39	n. s	31.66	16.72	12.89	n. s	n. s	5.74
	話さない	***		***	***	***			*
預金や保険	話をした	n. s	n. s	9.62	5.02	n. s	n. s	n. s	n. s
	話さない			**	*				
家事やしきたりを伝える	話をした	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	6.03	n. s	n. s
	話さない						*		
連絡先リストの作成	した	n. s	5.45	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	してない		*						
遺言状の作成	した	n. s	6.74	n. s	n. s	11.46	n. s	n. s	n. s
	してない		**			***			
身の回りの整理	した	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	4.29	n. s	n. s
	してない						*		
やり残したことへの取り組み	した	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s	n. s
	してない								

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

のみに女性が高実施しており有意差が認められた。年代別で有意差が見られた項目は、死についての話題では、「有名人の死について話をする」、「身近な人の終末期の世話について話をする」の2つであり、両項目とも70歳代のほうがより話をしてい

わち、「死が避けられない時の対応を伝える」、「希望する死亡方法を伝える」、「希望する死亡場所を伝える」、「家族の生活維持の方法を伝える」、「預金や保険について伝える」である。これらの項目については配偶者や家族がいるほうが有意に伝達している割合が多かった。希望する死亡場所を自宅と回答しているほうが「家族の生活維持の方法を伝える」については有意に話をしてい

て話すことに対する抵抗感がない群のほうが「身の回りの整理」が有意に多かった。看取り経験あり群のほうが「本やドラマの中の死」や「身近な人の終末期の様子」について話しており、その看取りを自分を中心になって行ったほうが「希望する死亡方法」、「家族の生活維持について」話をしていた。

もっともよく話をされていた尊厳死や病名告知については、いずれの個人属性による差異も認められなかった。

IV. 考 察

1. 希望する看取りと死亡場所

現在、老人大学に通学する生活を送っている高齢者が自分の希望している死亡場所は、1996年から2000年の5年間ではいずれも自宅が約50%でもっとも多く、5年間の顕著な変化は認められなかった。しかし、全国の死亡場所調査によれば自宅での死は1985年以降急激に減少し、現在は病院での死が約9割を占めている。これらの情報はテレビや新聞などを通じて一般にも広く知られていると思われ、また本対象の約7割が過去に体験した身近な人に対する看取りの最期の場所を、病院と76.8%が回答していることから、自宅での死の実現が困難であることは知識としては持っているように思われる。それにもかかわらず、自分の死に対しては自宅の希望が多いことは、依然として「畳の上で」と言われる死に対する意識が強いことが伺えた。しかし一方では、死亡場所としてどこでもよいという回答がいずれの年度にも10%ほど見られたことは、未だ死が現実的な課題として受け止めがなされていないのか、あるいは本当に死亡場所にはこだわらない考え方が広がってきているのかは明らかではなく、さらに綿密な調査が必要であろう。

最期を看取って欲しい相手は1981年に行われた「^つ終いの看取り」調査(井上, 1993)では配偶者が51.4%、子どもが65.7%であった。1996年から2000

年の本調査においても配偶者が60%とやや増加している以外はほぼ類似した結果を示していた。看取り者として配偶者の希望が上昇してきた背景には、1975年に16.9%あった3世代同居が1997年には11.2%になり、高齢者世帯が4.9%から14.6%へ増加してきた家族構成の変化(厚生白書, 1998)が反映していると考えられる。それはライフサイクルの変化による夫婦単位の考え方の浸透であると同時に、高齢者夫婦が最期までお互いを支えざるを得ない現状を示している。一方、看取りを希望しないという回答が1981年度は10.1%あったが、本調査では2%と1/5に減少していることから、家族などに看取られた死を望む高齢者が増加していることが出来よう。これを看取り者の希望としての配偶者の増加と併せて考えると、高齢者夫婦世帯の増加に伴い夫婦としての意識の再構築がなされてきているためと考えられる。これは家庭に望む機能の63%が情緒機能である(経済企画庁, 1990)ことや、宇都宮(1998)が高齢期夫婦の調査から人生の転機に夫婦の関係性の発達や深まりが見られ、配偶者との関係性が進化・成熟すると述べたように、人生の最期の危機である看取りを託す相手として、もっとも関係性の深化した配偶者が位置づけられていると推察出来よう。

2. 死についての話題と準備

死についての話題は尊厳死や病名告知などの、いわゆる3人称の死と言われるものについては話題にしている割合が高い。これは今の自分に直接の話題でないだけに話し易いためと思われる。さらに1997年に臓器移植法案をめぐり脳死の判定など医療を対象とした議題が社会的に行われたことが、日常生活の話題にも反映しているのであろう。1996年から2000年の5年間の変化を見ると、自分の死が避けられない時の対応について話をし、希望する亡くなり方を伝えるなど、自分の死への対処率が1997年を境に急増したことが明らかである。その背景には上に述べた死についての社会的

な定義が議論される状況となったこと、それに伴い死についての情報が増加してきたこと、また従来の医療が転換し本人のQOLを重視した考え方が広がってきたことや、以前ほど死についての話題がタブー視されなくなったこと、そして自分の意思を明らかにしておくことが大切であるという認識が広がってきたことなどがあげられよう。

3. 死の準備行動に影響する要因

年齢別分析から70歳以上の高齢者のほうが60歳代よりも、より死について話題にしている割合が高いことが示されたが、これは高齢になるほど死が近づくことを実感し、対処行動を取りやすくなるためと思われる。しかし、すべての項目にこの傾向が見られるかというと、有名人の死や身近な人の終末期の世話という、やや自分から離れた部分での話題が多い。自分の死についての希望や、死が避けられない時の対応など自分の死そのものにかかわる項目には年齢差が認められなかったことは、具体的に自分と関わりある事柄として死を認識してゆくのは、単なる年齢のみの要因ではないことを示している。これは先にも述べたように活動的な本対象の持つ特性とも考えられるが、死の不安には年齢差はない(Templer et. al., 1971)、高齢になるほど不安が低下する(河合ら, 1996、田中, 2000)など、年齢変数が死の認知に持つ影響力には未だ一貫した結果が得られていないことから、単純な歴年齢のみでは明確な特徴は捉えにくいと考えることができよう。

配偶者の有無および同居家族の有無による死の準備状態には、死が避けられない時の対応や希望する死亡方法を伝えるなど、死そのものについての対処に有意な差異が見られたが、これは家族に対して高齢者自身の意志の伝達が行われるようになって来ていると捉えることができよう。さらに希望する死亡場所が自宅群のほうが遺言状の作成が有意に少ないことも、すでに家族に意思を伝えていることが遺言状の作成に至らない背景になっ

たと考えられる。

死について話すことに抵抗感がない群のほうが身の回りの整理を行っていたことは、死について意識化し行動することに抵抗が少ないためと考えられる。

4. 看取り体験が死の準備に及ぼす影響

看取り体験が高齢者自身の死の準備行動に及ぼした影響については、身近な人の終末期の様子を話す、身の回りの整理にのみ関連が見られ、さらにその看取りを自分が中心になって行った群のほうが希望する死亡方法を伝達する率が高いことは、看取り体験が死についての意識化を促進する結果と言えよう。看取りの体験が死生観にどのように影響するのかについて、内田ら(1990)は青年前期では死の意識化についてマスメディアなどによる観念的な死は内在化しないと述べ、丹下(1995)も家族や親友との死別体験の有無や回数は、青年期の死生観にほとんど影響しないという結果を報告している。しかし、高齢者の場合は河合ら(1996)がつらい死別体験は死や死後についての認識を深めさせるとし、松下ら(1996)も自分の周囲で遭遇する死によって自分の考えや態度に影響を受けるのは60代に多いと述べており、高齢者の経験した看取りは青年期の体験とは違なり、死について考えさせ、態度変容のきっかけとなると言えよう。従って、看取りの体験が死そのものについての思索を深め、さらに死後の煩雑な経験が自身の死についての多方面の準備行動に向かわせると考えられたが、本調査からは一部の準備行動には影響が認められたが多面的な傾向は検証されなかった。これは調査対象の年齢が平均67歳とまだ若いための、あるいは本対象は老人大学の受講生であるために、さまざまな社会的な活動を積極的に行っていることから、まだ看取りの経験が広範囲に自身の死の準備にまで影響することがなかったのかは明らかでない。しかし、身の回りの整理という一項目ではあるが、死の準備行動としては余り

実施率の低い項目に対して看取りの体験が関連していることは、思い出の生活用品や品物の整理整頓を自分の手足を使って実施する原動力になったとすると、看取りの体験は死の準備状態を促進するための重要な要因として機能すると見なすことができよう。

このように、看取りなどの死に関係する経験は高齢者に死について考えさせ、態度変容のきっかけとなることが示唆された。

V. まとめ

われわれの人生にはライフイベントと言われる様々な出来事があり、それらに対してはあらかじめ準備することが多い。しかし、最もストレスが高い死というイベントについては前もって準備し学ぶという姿勢は乏しいと言われている。その理由の1つは死の到来時期が明確に定められないこと、また死ということは忌み嫌うものとして明確に取り上げて話題にすることを避ける規範があるためと思われる。しかし、Whitbourne (1985) は様々な出来事も突然出現すればストレスであるが前もって準備することで動機づけとして働き、それに適応できるようになると述べている。本研究から自身自身の死について前もって準備し、伝えておくことが大切であり、さらに看取りなどの体験がそれを促進する要因として作用していることが明らかになった。また時代の趨勢により死の準備行動が急激に進んでいる面も示され、死に関しても準備することで適応していく学習であることが示された。

文 献

- Deeken, A 人生の危機への挑戦 死とどう向き合うか。
NHK ライブラリー, 1996, 61-63.
平井啓・坂口幸弘・阿部幸志・森川優子・柏木哲夫 2000
死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—。死の臨床, 23, 1, 71-76.

- 井上勝也 1993 老人と終い。新版老年心理学, 朝倉書店
金児暁嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観。
大阪市立大学文学部紀要 (人文研究), 46, 537-564.
河合千恵子・下仲順子・中里克治 1996 老年期における
死に対する態度。老年社会科学, 第17巻2号, 107-
116.
経済企画庁国民生活局 1990 家庭観に関するアンケート調査
厚生白書 1998 世帯構成別にみた世帯数の推移。平成
10年度版厚生白書
松下孝子・野上悦子・吉久直子・伊藤信子・伊場田昌代・
新村千恵子 1996 年代別で見る死に関する意識調査
—一般社会人に対するアンケート調査より—。死の臨床,
23, 2, 175.
Spilka, B., Asout, L., Minton, B., & Sizemore, D. 1977
Death and personal faith; A psychometric investigation.
Journal for the Scientific Study of Religion, 16, 169-178.
田中愛子 2000 訪問看護婦の死に対する意識の分析研
究—看護学生、壮年期男性との比較から—。日本看護
科学学会学術集会講演集 20, 213.
丹下智香子 1995 死生観の展開 *Bulletin of the School
of Education, Nagoya University (Education Psychology)*,
42, 149-156.
Templer, D. 1970 The construction and validation of a death
anxiety scale. *The Journal of General Psychology*, 82, 165-
177.
Templer, D., Ruff, C. F. & Franks, C. M. 1971 Death Anxi-
ety: Age sex, and parental resemblance in diverse popula-
tion. *Development Psychology*, 4, 108.
上原ます子・石井京子・上野轟 2000 高齢者が体験した
看取りの意味と家族へのケアの課題。老年社会科学,
第22巻第2号, 191.
内田篤・吉田昭久 1990 児童・生徒の「死」及び「自殺」
に対する意識と攻撃性との関連 II—調査視点に関する
因子分析的検討—。茨城大学教育学部教育研究所紀要,
22, 161-171.
宇都宮博 1998 高齢期における配偶者との関係性と夫
婦人生の移行過程の検討。広島大学教育学部紀要第二
部, 47, 163-172.
Whitbourne, S. K. 1985 The Psychological Construction of
the Life Span. in Birren J. E. (Ed), *Handbook of the
Psychology of Aging*. Van Nostrand Reinhold. 594-618.
Wong, P. T. P., Reker, G. T. & Gesser, G. 1997 Death
Attitudes Profile-Revised: A Multidimensional Measure of
Attitudes Toward Death. Neimer (ed) *Death Anxiety Hand-
book*, 121-146.

[本研究は平成12～14年度科学研究費補助金(基盤研究
C・12610157)を受けて行われた]